



日本植物病理学会ニュース 第77号

(2017年2月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会

平成28年度日本植物病理学会北海道部会は10月19～20日にかでる2・7(札幌市)において開催され、約160名の参加があった。初日に開催された第221回談話会では、「いまこそセンチュウの防除について考えよう」をテーマに、(1) 奈良部 孝氏(農研機構北海道農研)による「ジャガイモシロシストセンチュウの発生と今後の対策について」、(2) 小野寺鶴将氏(道総研北見農試)による「ヨーロッパにおけるジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性品種育種の現状」、(3) 串田篤彦氏(農研機構北海道農研)による「有害線虫の多種同時診断技術」、(4) 東岱孝司氏(道総研十勝農試)による「ダイズシストセンチュウ抵抗性アズキ品種の育種とその抵抗性機作」の計4題の講演発表が行われた。北海道では、平成27年8月に、ジャガイモに大きな被害をもたらすジャガイモシロシストセンチュウが我が国で初めて確認され、現在関係機関が一体となって緊急防除が行われている。そのため、普及指導員など会員外の一般の参加者も数多く来場し、一時立ち見も出るなど非常に盛況な談話会となった。2日目の一般講演では、菌類病関連7題、線虫関連1題、ウイルス病関連7題の計15題の研究発表があり、活発な質疑応答が行われた。なお、次年度の北海道部会は、平成29年10月19～20日に農研機構北海道農研(羊ヶ丘)で開催予定である。(真岡哲夫)

(2) 東北部会

平成28年度日本植物病理学会東北部会は、9月29日、30日に、福島市コラッセふくしまにて開催され、一般72名、学生36名(合計108名)の参加があった。講演発表は、糸状菌病7題、細菌病3題、ウイルス・ウイロイド病14題、植物保護3題の合計27題であり、活発な議論と情報交換がなされた。幹事会・総会では次年度部会長に宮城大学食産業学部の中村茂雄氏が選出された。また、本年度の日本

植物病理学会東北部会地域貢献賞は、福島県植物防疫協会の平子喜一氏に授与された。初日の一般講演後に展望レストラン Ki-ichigo にて開催された懇親会では、多数の参加者で活発な情報交換がなされ、大いに親睦が深められた。平成28年度は青森県で開催が予定されている。

(東條浩幸)

(3) 関東部会

平成28年度日本植物病理学会関東部会は9月29日、30日の2日間にわたり、横浜国立大学常盤台キャンパス(横浜市保土ヶ谷区)の教育文化ホールで開催された。今回の関東部会は会場確保の都合で関連の会合と日程が重複し、参加者減が懸念されたが、名誉・永年会員5名、一般会員78名、学生66名(合計149名)とほぼ例年通りの参加があった。講演題数は34題で、その内訳はウイルス・ウイロイド病関係4題、細菌・ファイトプラズマ病関係4題、菌類病関係13題、植物保護・感染生理関係13題であった。各講演の質疑応答も活発に行われ、盛況であった。また、29日午前中の一般講演後には特別講演として、神奈川県農業技術センターの植草秀敏氏による「神奈川県における病害研究-防除対策技術の開発」の演題で講演いただき、神奈川県の様々な取り組みについて紹介され、大変好評であった。懇親会は神奈川県農業技術センター所長の北宜裕氏の挨拶に続いて、名誉会員の岸国平氏の乾杯のご発声ではじまり、和やかななかにも活発な議論・情報交換が行われた。次年度も引き続き横浜国立大学にて開催が予定されている。

(平塚和之)

(4) 関西部会

平成28年度日本植物病理学会は、9月29日および30日の2日間にわたって静岡市の静岡県コンベンションアーツセンターグレンシップにおいて開催された。参加者は258名であった。一般講演に先立ち、役員会および総会において次期部会長に名古屋大学の柘植尚志氏が選出された

旨が報告・了承された。また、次々年度（平成30年度）の部会は山口大学が担当して山口で行われることが決定された。総会終了後には今年度部会長の景山による部会長講演「*Phytophthora* 属菌の多様性」が行われた。引き続き一般講演が3会場に分かれて行われ、その内訳は感染生理45題、分類・同定・診断15題、発生生態1題、防除25題、その他3題の合計89題であった。いずれの演題においても活発な質疑応答が行われた。29日の一般講演の後、同じ会場において情報交換会が行われ、活発なディスカッションとなごやかな懇談が続いた。今回の部会は静岡大学瀧川雄一開催地委員長、平田久笑開催地幹事をはじめ静岡県内の試験場や大学関係者、企業の植物病理関係者のご尽力と絶大なご協力があった成功裏に終了することができた。ここに記して厚く御礼申し上げる。（景山幸二）

(5) 九州部会

平成28年度日本植物病理学会九州部会は、佐賀市の「ホテルグランデはがくれ」において、11月9日に第67回講演会（九州病害虫研究会との共催）が、翌10日に第40回シンポジウムが開催された。前日に同会場で土壤伝染病談話会が開催されたことから、参加者は講演会、シンポジウムともに例年を超える約100名であった。一般講演はウイルス病関連6題、菌類病関連12題、細菌病関連5題の合計23題で、活発な質疑応答が行われた。合わせて企画された平成27年度受賞者講演では、地域貢献賞の松崎正文氏（日本農薬）から「新発生野菜病害の病原および生態の解明とそれらの知見に基づく防除技術の開発並びに普及」について、地域奨励賞の福元智博氏（鹿児島農開総セ）から「トケイソウ東アジアウイルス（EAPV）の分子生態学的研究」についてそれぞれ講演があった。幹事会では、部会役員交代・選出、庶務会計報告、平成28年度九州部会賞授賞者、部会会則と地域奨励賞受賞規定の改正、次年度活動計画等が審議された。総会では、次期部会長として大分県農林水産研究指導センターの吉松英明氏が承認され、地域貢献賞は吉村大三郎氏（元福岡農総試）、地域奨励賞は野口真弓氏（佐賀果樹試）、学生優秀発表賞は入江沙織氏（九州大院農）の各氏が受賞された。10日のシンポジウムでは、西日本地域でのタマネギべと病の多発生を受けて「べと病」をテーマに3名の方々から講演があった。佐賀県農業技術防除センターの善正二郎氏からは「佐賀県におけるタマネギべと病の発生状況と今後の防除対策について」、農研機構・野菜花き研究部門の佐藤 衛氏からは「べと病の発生と分離・培養のコツ」、千葉県農林総合研究センターの横山とも子氏からは、「千葉県秋冬ネギにおける

ネギべと病防除支援情報システム「ねぎべと病ナビ」の開発とその利用」と題して話題提供があり、シンポジウム終了後も演者を囲む輪が続いた。最後に、部会開催にご尽力いただいた佐賀県始め関係各位に厚くお礼申し上げる。次回は沖縄県那覇市で開催される予定である。（平八重一之）

【関連国際会議開催状況】

2016年度アメリカ植物病理学会大会報告

本年度のアメリカ植物病理学会（APS）大会は、7月30日～8月3日にフロリダ州のタンパコンベンションセンターで開催された。タンパはフロリダ半島の中西部に位置し、メキシコ湾に面する。日本からはアメリカ国内で飛行機を乗り継いで約16時間かかった。大会初日はワークショップやフィールドトリップ、APSの各種委員会が行われ、2日目から招待講演（Special Sessions）、口頭発表（Technical Sessions）、ポスター発表が行われた。一日のうちおおむね午前か午後のどちらかが招待講演または口頭発表というスケジュールであった。

参加者は1,500人以上、アメリカの大学や農薬メーカーなどの研究者が中心で、アジアからは中国、台湾などの研究者が多く、日本人には会うことができなかった。気温が30°C前後と暑く、参加者の服装は、襟付きのシャツかTシャツ、靴はスニーカーやサンダルといったスタイルが見受けられた。

発表は招待講演が116課題と全体に占める割合が日本の学会より多く、口頭発表が124課題、ポスター発表が804課題であった。招待講演のテーマは、Phytobiome、CRISPR-Cas技術（ゲノム編集）など病害分野に留まらず、それにも関わらず多くの聴衆を集めているのが印象的であった。



写真1 会場となった Tampa Convention Center.

口頭発表は、テーマ別に分かれており、ウイルス、糸状菌、バクテリア、線虫、殺菌剤などに始まり、薬剤耐性菌、メタゲノミクス、病原多様性、宿主抵抗性、等温検出技術など後半は最近のテーマが目についた。口頭発表は1課題15分、発表の進行は厳密で、質疑応答の時間に余裕がなく、質疑はその場では少数であったが、会場はどこも満席であった。薬剤の防除効果や新病害の発表については、日本と類似しており、理解しやすい内容であった。開催地の土地柄のためか、ウイルスの発表は果樹の課題が多く、国内未発生種の報告もあり、今後の参考になった。等温検出技術として、LAMPやAmplifyRP (agdia社)を利用した発表があり、検出には精製せずに粗汁液をそのまま用いていた。特にLAMPは本大会でワークショップも開催されるなど日本同様、普及している様子が窺えた。



写真2 ポスターセッションでのディスカッションの様子。



写真3 ポスターセッション会場の様子。

ポスター発表は、病原、防除法、診断等の31のカテゴリーに分類され、筆者は「Control of tulip mild mottle mosaic disease and tulip streak disease based on soil diagnostic」というタイトルでポスター発表を行った。要旨の締め切りは前年度内なので、参加される方は注意されたい。ポスター発表は奇数と偶数に分けてコアタイムがあり、参加者からはチューリップのウイルス症状等について質問を受けた。

大会のプログラム冊子は当日会場での受け取りとなる。事前にモバイルアプリをダウンロードすれば、要旨を閲覧することができるほか、学会でのスケジュール管理に役立つのでお勧めである。

初めてのAPS大会の参加であったが、情報収集に加えて国際学会の雰囲気や病害研究のトレンドを感じることができ大変有意義であった。来年は8月5～9日にテキサス州のサンアントニオで開催される。(桃井千巳)

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

藤川貴史氏（農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門）と前島健作氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）が、第15回（平成28年度）日本農学進歩賞を受賞されました。日本農学進歩賞は、農林水産業およびその関連産業の発展に資する農学の進歩に顕著な貢献をした優秀な若手研究者を顕彰する賞です。受章の対象となった研究業績は、藤川氏が「カンキツグリーンング病根絶対策を加速する簡便迅速な検出法開発」、前島氏が「プラムポックスウイルスの高度診断技術の開発および分子疫学的研究」です。

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、平塚和之、池田健太郎、吉田重信、越智直

編集後記

新年おめでとうございます。新年にあたり、会員皆様のご健勝と学会の益々の発展をお祈りします。

学会ニュース第77号をお届けします。本号は、部会の開催報告を中心に掲載しました。

北海道、東北、関東、関西、九州、いずれの部会も参加者多数で盛会裡に開催されました。北海道部会ではジャガイモシロシストセンチュウの発生を受けた「センチュウ防除」、九州部会ではタマネギべと病の多発生を受けた「べと病」、と現在、地域で最重要となっている問題をテーマにシンポジウム、また関東部会と関西部会では病害研究や防除対策技術への長年の取り組みや成果をテーマに特別講演が行われています。一般講演での活発な質疑応答とともにシンポジウムや特別講演でも有益な情報交換が行われたようです。さらに東北部会と九州部会では地域貢献賞等の

授与が実施されています。開催にご尽力いただきました関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

アメリカ植物病理学会大会参加の報告を桃井氏からいただきました。ご発表だけでなく病害研究の現状把握や情報収集に大変有意義であったとのこと。日本からの参加者は少なかつたようで、来年のサンアントニオ大会への多くの会員の参加が期待されます。

昨秋、藤川貴史氏と前島健作氏が日本農学進歩賞を受賞されました。誠にうれしいお知らせです。おめでとうございます。両氏の今後益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

今年も本欄では学会関連の各種多様な情報をご提供したいと思っております。引き続きのご愛読と情報の提供をお願いいたします。
(高橋賢司)
